

現代モンゴルにおける定住型住居の敷地利用と集住の実態に関する分析 ーモンゴル国ウランバートル市「ゲル地区」における定住型住居集合の実態調査からー

中村智裕（指導教員 八尾廣）

1. 研究背景

モンゴル国では 1992 年の社会主義体制崩壊以降、市場経済へと移行し急激な経済発展と首都ウランバートルへの人口集中が続いている（2011 年の実質 GDP は前年比 17.3%増で世界 2 位）。それは、ウランバートル市内の都市形成にも大きな影響を与え、ウランバートル市の人口は 1944 年の時点には約 3 万であったのに対し、2012 年時点では 120 万人を越える規模となった。1997 年の人口移動の自由化の後、遊牧民が流入し、ウランバートル市の東西、北方の谷筋に「ゲル地区」と呼ばれる無計画な低層の住居地域が拡大している。遊牧民の多くはゲル（Ger）を持ち込んで定住生活を始めるが、やがて木造、煉瓦造の固定住居バイシン（*baishin*）を建てて住まうようになる。しかし、これらはモンゴル独自の様式ではなく、ロシア、中国、カナダから輸入された建材や構法の寄せ集めによってつくられた住宅であり、木柵で敷地境界を閉鎖的に囲うなど、様々な伝統や様式が混在するスラム的様相を示している。

2. 本研究の目的

「ゲル地区」ではこれまで、その閉鎖的な様相と治安の悪さゆえに住居内の住まい方にまで立ち入る学術的調査は行われていない。我々の研究室では、2013 年 9 月における夏季調査と 12 月における冬季調査の 2 回にわたり、ゲル地区開発局の協力のもと、ゲル地区住居内の詳細な実測調査及び住民へのヒアリングによる住まい方調査を行った。本論では上記調査をもとに、永い移住文化の歴史をもつモンゴルの人々が「ゲル地区」において土地を所有し定住を行う中で、土地をどのように利用し生活を営んでいるかに焦点をあて、その実態を明らかにすることを目的とする。

3. ゲル地区の概況

ウランバートル市は、モンゴル国トブ県の中央北部に位置し、ディストリクト行政界としての 6 つの区がある。JICA の報告書^{*1}によると、中でも「ゲル地区」と呼ばれる住居地域は 22 地区に分類される。都市計画はなきに等しく、舗装された幹線道路添いに無計画に拡大した住区の多くは道路も無秩序で舗装がされ

ていない。2003 年より施行された土地私有化政策（『土地所有法(2003 年)』：UB 市では一家族あたり最大 0.07ha の居住用地を 1 回に限り無償で所有登録できる）によると思われるが、各住戸は比較的豊かな敷地面積を木柵塀ハシャ（*khashaa*）で囲い、家族構成の変化に応じゲルを適宜用いながら、多くは自力で木造、煉瓦造のバイシンを建てて住む。敷地境界の木柵は高さが 2m 前後もあり、外部とのつながりはなく、非常に閉鎖的で道路側に対しても閉じている。住民は中～低所得者層であり、ウランバートルで何らかの職につく人々が日常生活を営んでおり、小学校、保育所、給水所等の公共施設も不十分ながら整備されている。

生活インフラは未整備であり、電力のみ普及しているものの、市中心部にあるような給排水設備、暖房供給設備はなく、衛生問題や冬季における住居の石炭ストーブからの煤煙による大気汚染が深刻な都市問題となっている。JICA の報告書^{*1}によれば、2007 年にゲル地区住民をアパートへと収容することによる大気汚染改善のための特別措置法が国会で決議されたが家賃の高いアパートへの住み替えは進んでいない。2012 年に就任したバトウル市長はゲル地区の住環境改善を公約に掲げ、2013 年よりゲル地区開発局を設置し再開発を本格的に始めたが、今の段階では中心市街地に近いゲル地区の高層アパートへの建て替え計画が中心である。住民の多くは経済状況からみて高層アパートに入居することは難しく、現在の居住形式を維持しつつ、生活インフラや環境が改善されることを望んでいる。



図 1. ウランバートル市北部に広がるゲル地区

4. 調査概要・方法

・調査日程：

夏季調査：2013年9月1日～9月16日

冬季調査：2013年12月22日～12月30日

・調査方法：

a) ヒアリング調査

質問紙による住民への聞き取り調査を行った。聞き取りの内容は、回答者の基本属性を問うものと、住居内で行われる生活場面や生活姿勢などの住まい方を問うもの、ゲルや遊牧文化に対する意識調査である。冬季調査では、夏季調査を行った住居の一部を再訪し、夏季と冬季の生活の違いについてのヒアリングを行った。

b) 図面作成のための実測調査

平面図、配置図作成のため住居各部の寸法や、空地の広さ、木柵との距離などをレーザー距離計と巻尺を用い実測した。

c) 住居内外、敷地周辺の写真撮影、動画撮影による映像的記録

図面のみでは得られない場所の様子や質感等の詳細情報を補完するため映像的記録を行った。

d) 家具の写真撮影、スケッチ等による記録

生活場面や姿勢に大きく関わるとされる家具については実測し、スケッチなどで記録した。

e) データロガー付き温湿度計による室内外の温室度調査

住居内の室内温湿度環境を把握するため、温湿度計を対象とする住居の東西南北に対応する部屋それぞれに、床から300mm、約1500mmの位置に各1台ずつ設置しデータを収集した。住居外部にも一台設置し外部の温湿度も計測した。

d) 流通している建築資材の現状視察

ゲル地区の住居はセルフビルドで建てられたものが多く、住居の構法や建材の種類と価格帯を補完するため、ウランバートル市内の建築資材市場において、流通する建材の種類や価格変動についての情報収集を行った。主として建材販売業者へのヒアリングによる情報収集である。

5. 調査結果、抽出

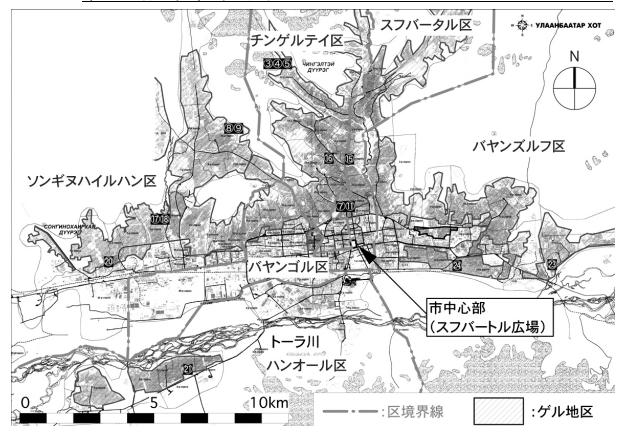


図2. 調査住居プロット図

図2は今回の夏季調査時の調査住居の位置をウランバートル市街図にプロットしたものである。調査した住居の25件中23件がセルフビルドによるものであった。このため、住民の生活形成能力すなわち「住まう力」がダイレクトに住居の配置や敷地内領域の形成に現れており、敷地利用においても住居により大きな差が見られた。ゲル地区における敷地利用と集住のあり方において我々が着目したポイントは以下の3つである。1. ツールとしてのゲル、2. 敷地内の空地利用の未分化性、3. 敷地内住居の配置と方位との関係である。

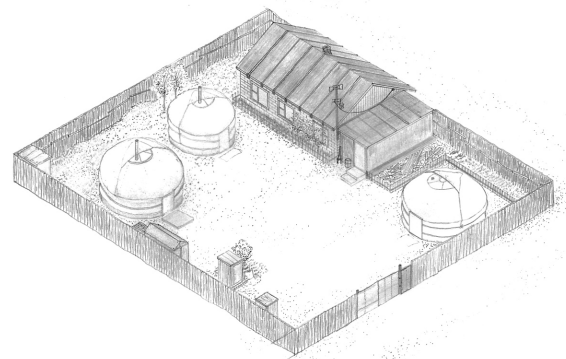


図3. 調査住居 No. 015 アイソメ図

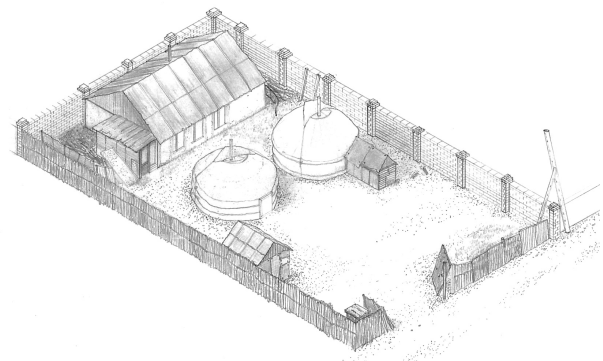


図4. 調査住居 No. 011 アイソメ図

5. 1 ツールとしてのゲル

まず1つ目は、同敷地内にバイシンとは別に家族構成の変化に応じて適宜ゲルを用い、複数世帯が住む例(図3)である。図4はバイシンの老朽化に伴い住環境が悪化し、同敷地内にゲルを建て住んでいるケースである。この住居は今回調査した中でも最貧層の住民であり、2つのゲルに3世帯、計17人が住む。移動住居ゲルはコストが安く、極めて短時間(約2時間)で建設可能であり、かつ氷点下でも石炭ストーブがあれば生活可能な優れたシェルターといえるが、「ゲル地区」という定住の場合においては、ゲルは様々な住環境や家族構成の変化に柔軟に対応するためのツールとして用いられていることが見て取れる。

5. 2 敷地内の空地利用の未分化性

2つ目は、敷地内の空地利用の未分化性である。今回の調査で見られた敷地内の要素はバイシン、ゲル、トイレ、倉庫、駐車場、資材置場、廃材置場、菜園、畑、一部観賞用の樹木であったが、多くの住居で敷地は要素の配置、領域共に曖昧で無秩序であった点である。都市集住の状態において各住居が比較的広い敷地を所有していながら十分に活用できていない。こうした状況の背景には様々な理由が考えられるが、都市定住の歴史の浅いモンゴルにおいては土地利用の観念そのものが形成されていないのではないかと。あるいは、遊牧文化における土地を掘ることに対する禁忌の意識が土地利用を無意識に阻んでいる可能性も考えられる。

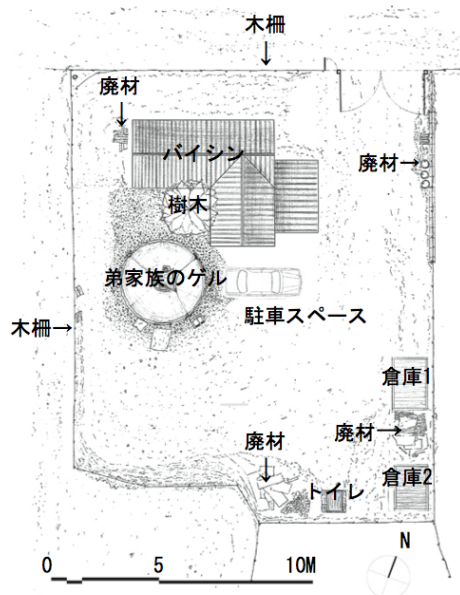


図5. 調査住居 No. 020 配置図



図6. 調査住居 No. 020 敷地内空地の様子

5. 3 敷地内住居の配置と方位との関係

3つ目は敷地内住居の配置と方位との関係である。敷地内に固定される主要要素はバイシン、ゲル、トイレ、倉庫の4つであるが、これらの要素が敷地内のどの方位(領域)に配置される傾向にあるかを把握するため、今回調査した25件について(No. 4, 5は同一敷地にあるものとした)敷地の輪郭線と上記4要素のみを抽出した図を作成した。さらに敷地形状の重心を中心とし、東西南北のゾーニングを重ね合わせた図(図8)を作成した。

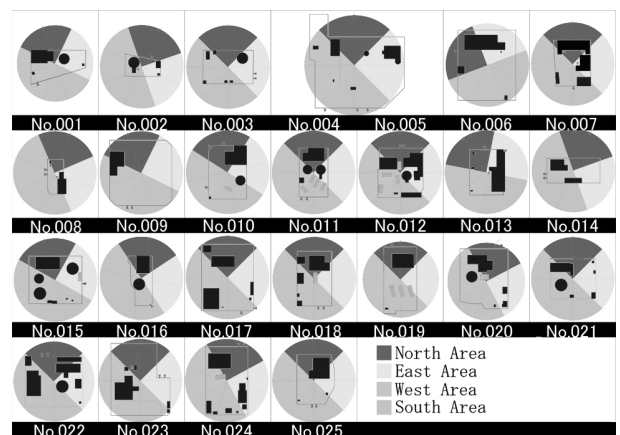
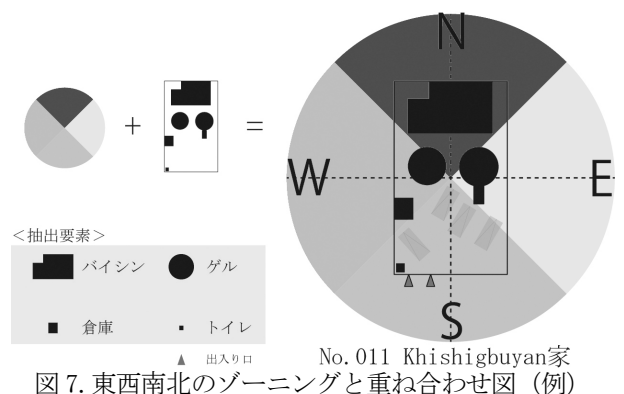


図8. 各調査住居の配置と方位との関係

調査住居25件について主要4要素と方位との関係をスターグラフに表したのが図9である。サンプル数が少ないので必ずしも一般論とはできないが、バイシンは道路との関係によらず、敷地内の北の領域に配置される傾向にあり、トイレは南に配置される傾向にあることが分かった。また、ゲルに関しては東西どちらかの領域に配置されるケースが多く、倉庫については配置方位に特に傾向は見られなかった。

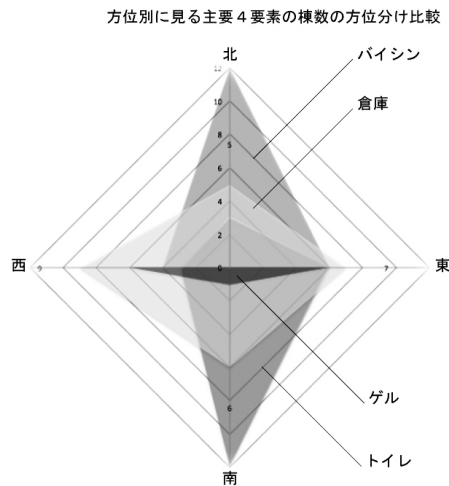


図9. 方位別にみる主要4要素の棟数と配置の比較

6. 考察

今回の調査結果では道路位置に関わらず固定住居バイシンを北側に寄せ、南側を大きく開けて住まう様子が見られた。冬季の最低気温が -30°C にもなる厳しい自然環境から、南側の土地に昼間の日照による蓄熱を少しでも行おうとする意識の現れであるかもしれない。モンゴルでは「ウヌル」という言語は「前の」と「南の」を同時に意味するが、住戸の入り口を南側へ向けて建てるゲルと同様に、自然環境から要請される条件が固定住居バイシンにも求められるのではないか。

また数少ないケースであるが、図10、11のように敷地内に畑や菜園を設け、外部にベンチやテーブルを出して気持の良い外部空間を形成している例も見られた。広い敷地の活用法によって非常に豊かな住環境を得られる事をゲル地区の人々に浸透させることの重要性を改めて認識した。

敷地境界の木柵ハシヤが2.0m前後と高いことに関しては未だその理由は明らかとなっていないが、良好な住環境形成の妨げの一因となっていると思われる。ハシヤは「柵そのもの」と同時に「柵で囲った区画」

のことも意味し^{*2} 自己の領域を他の空間と差別化し、確保する意識の現れとも推測できるが、ハシヤのあり方も今後の住環境形成の上で重要な要素となることが確認された。

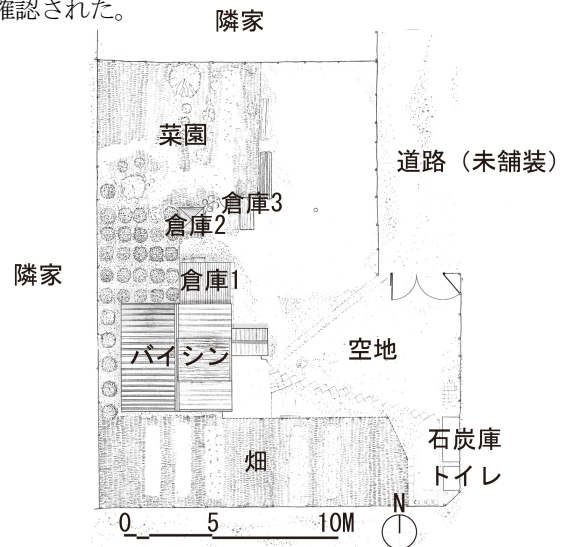


図10. 調査住居 No. 023 配置図

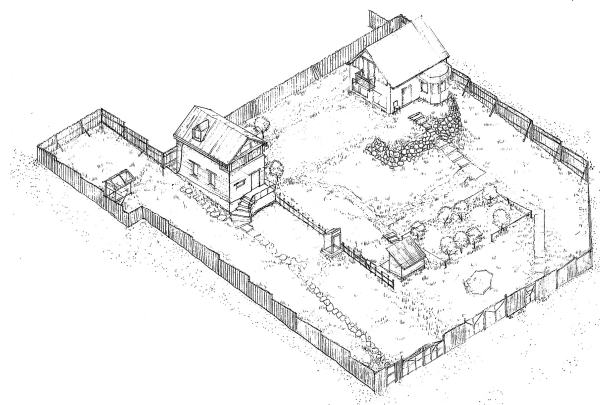


図11. 調査住居 No. 004, 005 アイソメ図

7. まとめと展望

今回の調査により、ゲル地区内住居における敷地利用の未分化性、固定住居バイシンの配置の傾向、都市居住における移動住居ゲルの役割の変化といった実態が明らかとなった。ゲル地区は経済的理由が生んだ都市集住の一形態であるが、そこには移住から定住への過渡期を示す様々な事象が見られる。今後も研究を続け、モンゴルの定住文化形成に向け知見を提供してゆきたい。

引用参考文献

*1: JICA モンゴル国ウランバートル市都市計画マスタープラン・都市開発プログラム策定調査・最終報告書(要約) 2009

*2: 滝口良 「土地所有者になるために: モンゴル・ウランバートル市における土地私有化政策をめぐって」 北方人文研究 第2号 2009